

最近の中国における洋務運動研究

(帝塚山大学) 林 要三

周知のように、現在、中国の歴史学会では洋務運動の評価をめぐる論争が展開されている。洋務運動の評価問題は、1960年代にかつて論争されたことがある。しかし当時、論争は十分な展開を見ないまま、“左”傾的風潮の強まる中で中断されてしまった。“十年浩劫”の文化大革命が終息し、1978年12月の中共十一期三中全会を経て、学界の正常化が進むや、洋務運動研究は再開された。今回は当初から論争の様相を呈し、その規模と深度において、60年代のそれをはるかに凌ぐ勢いである。

論争は現在のところ、全面否定論、全面肯定論、両点論が対立し、三者鼎立の局面が続いている。全面否定論にたいする批判が一つの機軸となっている点で、それは60年代の論争の継続といつてよい。他方、最初に全国規模の討論会が開催されたこと、経済法則の重視が公認の立場となりつつあること、資本主義発展を軸に、中国近代史像の再構成が試みられていることなどは、論争の新たな展開を示すものである。

今回の論争では、改めて“百家争鳴”、“实事求是”が強調され、その定着化のために真剣な努力が払われている。研究面では、個別実証研究が多くなり、その対象も経済史分野にとどまらず、各分野に広がっている。新史料の発掘、未公刊史料の整理が進み、精緻な研究が一段と保証されつつある。

本報告では、今回の洋務運動論争の経過と論争点について概略的な紹介を行ない、あわせて当面の論争の意義を検討してみたい。

1930年代の宋慶齡を取材して

— 中国革命における宋慶齡の位置 その2 —

(中国研究所) 久保田 博子

はじめに

さきに、「中国革命における宋慶齡の位置（その一）— 所謂〈宋慶齡の左傾〉について」（『中国研究月報』423号）において、1920年代における宋慶齡の所謂〈左傾〉を問題にした。第一次国共合作前後における中国共産党、ソ連代表、コミンテルン代表との接触、孫文死後の上海における向警予等中国共産党女子青年グループとの緊密な交流、五・三〇事件とのかかわり、1927年の武漢政府における立場、同年7月の国共決裂、8月の南昌蜂起支持にふれて、モスクワに赴くときの宋慶齡の政治的位置、思想的立場を問うた。この時点で「もはや革命的民主主義者でなくプロレタリア国際主義者であった」^①というのは、どう理解すればいいのか。武漢及びそれ以後における国民党左派とは何か。モスクワでの彼女の言動はどうだったのか。これらの問いかけを抱きながら、筆者は、この8月、中国を訪問、北京・北戴河・武漢・上海の各地で、主として1930年代の宋慶齡と活動を共にした彼女の友人たち及び家族と会見・取材した。

1928年から1931年にかけてのモスクワ・ヨーロッパ滞在をはさんで、宋慶齡の中国革命とのかかわりは、型・質ともに大きな変化と独自性を示すことになるが、今回の取材は、これらの点を理解するのに有益であった。本稿は、このような観点から取材した内容の一端を報告することに重点をおきたい。

1. 錢俊瑞氏の証言

錢俊瑞氏とは、8月2日、中国社会科学院近代史研究所にて会見、対談した。^②

① 宋慶齡の代理で国際会議に出席

錢氏は、陳翰笙氏と同世代の農業経済学者として知られるが、中国革命とのかかわりでは、宋慶齡と多くの場面で活動を共にした一人である。「宋慶齡との出会いは……私を立ちどころに革命青年にした」と彼は述べた。

両者の出会いは、1931年「陳翰笙の紹介でアグネス・スモドレーを知り、スモドレーの紹介で宋慶齡と知り合った」ということであるが、緊密な交流がはじまるのは、1936年8月以降だった。

1936年7月、宋慶齡は、本部をパリに置く国際反ファシズム委員会から通知を受けとった。それは、「9月10日にパリで拡大会議を開き、スペインの反フランコ闘争を援助し、各国の反ファシズムの大衆運動を援助することについて討論したい」旨のものであった。当時宋慶齡は、国際反ファシズム委員会の副議長の任にあり、議長はアンリ・バルビュス、名誉議長はロマン・ロランだった。③

宋慶齡は、1927年から1931年にかけてのモスクワ訪問、ヨーロッパ諸国訪問・滞在のなかで、国際的な反帝国主義、平和擁護及び反ファシズムの活動に積極的な参加、多くの国々の革命運動とも連絡をもち、すでに国際的声望が高かった。しかし、当時の彼女には、實際上自由行動は不可能で、出国する方法はなかった。上海仏租界モリエール路の彼女の住居は国民党特務にとり囲まれていたからである。

「宋慶齡とわれわれ地下の党は連絡して、彼女の代理として私をパリで開催の国際ファシズム委員会に参加させることにした。」— 8月15日、彼女はスモドレーを通して私を安全に彼女の住居に導き、この決定を私に知らせることにした。— 「私はまずスモドレーの家に行って、その家の裏門から出てぐるぐる歩きまわって、夜、モリエールの宋慶齡宅に入った」、「この第一回の懇談には、スモドレーの他に胡愈も同席した」そして

「第二回目の訪問のときには、米国の反ファシズム運動家を私に紹介した。」彼は宋慶齡にパリに赴くことを求めて来華していたのである。

このとき、宋慶齡は、次のような要旨の声明文を錢氏に託した：『世界中の人民はすべて団結しなければならない。われわれは、ヒットラーやムッソリーニのファシズムに反対するばかりでなく、日本の軍国主義や金融資本家のファシズムにも反対してたたかかねばならない。なぜなら、彼らはすべて残忍な侵略者であり、圧制者であるからである。更にわれわれは、蔣介石のファシズムに対してもたたかかねばならない。なぜなら、それは人々を抑圧し、中国の領土と主権を外国に売り渡しているからである。……中国におけるたたかいとヨーロッパにおけるたたかいは目指すところは完全に同一である。この二つのたたかいは同じ原因から生れている。世界中の人々はみなファシズムと圧制と搾取に反対してたたかうために立ち上がらなければならない』

錢氏は、8月末上海をたち、モスクワ、ベルリンを経て、まず、9月2日ベルギーのブリュッセルで開かれていた世界反侵略大会に、上海文化界救国会④を代表して参加、そのあと、国際反ファシズム委員会の会議に出席した。

② 蘇聯之友社：宋慶齡が会長

この〈蘇聯之友社〉については、さきに拙稿「宋慶齡関係略年譜稿」（『辛亥革命研究』第3号 1983.3.）の註（189）において、章乃器の「我和救国会」（『救国会』中国社会科学出版社、1981.10月）の〈蘇聯之友社〉に関する回想を引用して、「蘇聯之友社の活動は、ソ連の政治・経済・社会状況を紹介するもので、外交上ではモスクワ路線を主とし、ワシントン路線を副として、東京路線は絶対に許してはならないと主張」と紹介し、「蘇聯之友社はのちの中ソ友好協会である」とした。

この「外交上の路線……」について、錢氏に、具体的説明を求めたところ、錢氏は、「そのよう

な主張をした事実はない」とし、「帝国主義に反対し、ソ連を紹介・防衛することを目的としていた」と答えられた。銭氏によると、この蘇聯之友社は、「大衆組織であって、ソ連に関心のある人、革命的インテリが参加し、共産黨員もいた。章乃器は黨員ではなく、民主人士の一人で、他に胡愈之、金仲華、張仲実、沈志遠が参加していた。宋慶齡は会長をつとめ、私は秘書長をつとめていた。私はすでに黨員であったが、そのことは知られていなかった」「蘇聯之友社は、1930年代の初めに設立され、《世界知識》を出版したが、1936年に解散した」、そして、この〈蘇聯之友社〉は、新中国成立直前に設立された〈中ソ友好協会〉とは、前身、後身の関係にないときっぱりと説明された。

また、〈蘇聯之友社〉のころの宋慶齡について、「宋慶齡は勉強家で、よくマルクス主義を学習し、このころから“入党要求”をもっていた」とされ、前述の1927年のモスクワ訪問の時期に「彼女はすでに革命的民主主義者ではなく、プロレタリア国際主義者であった」という指摘について、さらに詳しく氏独自の見解を示されたが、後日改めて紹介したい。

2. エプスタイン〔Israel Epstein.

愛潑斯坦〕氏の証言^⑥

① 《中国建設〔China Reconstructs〕》

エプスタイン氏は、中国建設雑誌社の総編集の地位にある。中国建設雑誌社は、宋慶齡によって、北京に創設されたもので、上海の児童時代社とともに、中国福利会の出版部門を形成している。

中国建設雑誌社は、総合月刊誌《中国建設》を1952年に創刊し、英・仏・西・露・独・阿(アラビア)・漢の7種の言語で刊行している。《中国建設》は、中国の社会主義革命と社会主義建設の情勢を国外に宣伝・報道することを任務としているが、その来歴は中国福利会のそれと軌を一にしている。すなわち、抗日戦争の時期に、中国福利会

の前身である保衛中国同盟が香港で、日本の帝国主義侵略に抵抗する中国人民の真相を世界に知らせるために英文で発行した《保衛中国同盟通訊》にはじまる。抗日戦後は、保衛中国同盟を改称して、上海で発足した中国福利基金会のもとで、各種の形式をとりながら、解放区のことを国外に伝え、国内では、反動派の流言、言論に抗し、真実を伝え、革命根拠地、解放区の人々と国外の進歩的な人々との連帯を促し、中国人民のたたかいが国際的支持を得るために重要な役割を果たし、新中国成立後の《中国建設》に引き継がれたのである。

このように、宋慶齡によっておこされた保衛中国同盟、中国福利基金会、中国福利会という一連の活動の中で、一貫して国際的宣伝報道活動を担ってきたのが、エプスタイン氏である。彼は、1938年から1981年まで、これら一連の事業を宋慶齡とともにし、いまなおその道にある。

② ポーランドから日本を経て中国に

エプスタイン氏は、1915年、ワルシャワで生れたが、間もなく祖国を追われ、ユダヤ人の母と2人で日本に立ち寄り、一年間ほど神戸に住んだあと中国に渡り、ハルビン～天津～北戴河と転々として天津に定住した。

「天津の英国租界に18年間住んだ。1925年宋慶齡が孫文とともに天津を訪れたとき、初めて宋慶齡の写真を新聞紙上で見た。私は10歳で、小学生だった」

「父母は社会民主党の黨員で革命的であったが、一般的には改良主義者であった……国民党の目で見ても、日本人の目で見ても、英米人の目で見ても、父母は危険人物 — 赤色であった。」「第一次国共合作のとき、父母は孫文を支持し、4・12クーデターでは蔣に反対した」

③ 新聞記者として

「大学には行かず、15歳で新聞記者になった(1930年)」「1932年、エドガー・スノーとはじ

めて会ったが、1935年の12・9学生運動の中でスノーと友だちになった。スノーはこの学生運動に深くかかわっていた。そしてこの運動は、20歳の私に大きな共感と影響を与えたばかりでなく、この運動を通じて私は中国革命と直接かかわるようになった」

「1936年に私はU.Pの通信記者になり、1937年7月7日には北京にいた。日本軍の侵略とともに、私は国民党の従軍記者として、北京から南京、武漢、広州へと移動した。広州では、丁度第二次国共合作後だった」

しかし、この広州でU.Pの上司は、抗日戦は失敗に終るという見通しのもとに記者の減員を打ち出した。これに対して、エプスタイン氏は、抗日戦は必ず勝利すると主張して上司と衝突、日本軍占領地域で仕事ができなくなった上、国籍のない記者は捕虜になるといわれ、1938年、U.Pを辞めた。

④ 保衛中国同盟広州分会の成立

従軍記者としてたどり着いたこの広州で、エプスタイン氏は、宋慶齡と出会うことになった。

宋慶齡は、1937年の日本軍の第二次上海侵略を逃がれて香港に渡り、抗日戦支援のために、この年の6月、香港で保衛中国同盟の中央委員会を発足させ、7月に広州を訪れ、滞在していたのである。

「私は、宋慶齡が侵略者に対する火のような怒りのデモ(9・18)の隊列の中で行進するのを見た」、「私は、彼女がどのように熱心に、アタル医師が率いる印度医療使節団^{註⑥}を歓迎したかを、この目で見たし、この代表団が延安を訪問するのをどんなに励ましたかを、この目で見た」

「宋慶齡は、広州にいる間に多くのことをした。その中の一つが、保衛中国同盟の広州分会の結成である」、「保衛中国同盟は、当初は中央委員会が組織のすべてであった。小さい組織であったが、大きな影響力をもっていた。それは宋慶齡が指導

していたからである。顔ぶれは国際的であった」、「二つの目的をもち、この二つの目的は互いに関係をもっていた。；一つは、国外と華僑の中に抗日運動を宣伝すること、つまり、真の抗日先鋒の働きを宣伝し、中国共産党指導下の武装力と根拠地を宣伝することであり、二つめは、全世界に向かって医薬とその他の援助物資を募集することであった。」

「宋慶齡は、すでに私のことを知っていた。それは、彼女が上海で援助して刊行していた《Voice of China》に、私も文章を発表していたからである。」、「宋慶齡は、私と嶺南大学の米国人教師などいく人かをまとめて広州分会を発足させた。こうして、私と宋慶齡との40年間の連携がはじまり、保衛中国同盟とのかかわりもはじまった」

1938年10月の広州陥落後、エプスタイン氏も香港に渡り、保衛中国同盟本部の英文情宣を担当、《保衛同盟通信(新聞通説)》の発行を担った。

エプスタイン氏は、1945年の抗戦勝利後、米国に赴き、1951年まで滞在して、著作活動(1947年、《未完成的中国革命》を米国で出版)^{註⑦}のかたわら、米国の中国に対する干渉に反対してたたかった。帰国後、前述の《中国建設》雑誌社で編集を担当、1950年代末に中国国籍を取得した。

エプスタイン氏は、宋慶齡の伝記を準備中である。筆者との2回の対談では、宋慶齡の人間像、思想及びよくいわれるクリスチャニティについて突込んだ討論をしたが、本稿では字数の関係で報告できない。稿を改めて報告したい。

3. ルーイ・アレー [Rewi Alley, 路易艾黎]氏、

ジョージ・ハテム [George Hatem, 馬海德]氏、

バサー [B. K. Basu, 馬蘇]氏、エプスタイン氏との座談から^{註⑧}

① ルーイ・アレー氏

「1927年4月12日の蔣のクーデターの一週間

後に上海に上陸した。中国革命とは何か？革命とは何をするのか？を見に来た。自分は、何も知らなかった」、「まもなく工場につとめ、工場の生産の安全性の調査に従事するようになった」

アレー氏は、1897年12月2日、ニュージーランドのカンタベリーで生れた。ルーイという名は、1860年代のイギリスの侵略者に抵抗した独立運動の指導者マオリ人酋長ルーイ・マニポトにちなむという。父はアイルランド人で進歩的の社会観をもった校長であり、農業協同組合運動の熱心な支持者であった。母はイングランド人で、16歳でニュージーランドに渡り、1891年から婦人参政権運動に参加し、1893年に世界史上最初の国政における婦人参政権を実現した当事者の一人であった。この母と宋慶齡について、アレー氏は、「私が帰国するとき宋慶齡は、私の母に、竜を見事に刺繍した絹の肩かけを贈ってくれた」と語った。

上海市工部局工業司の工場監督官になったアレー氏は、工場視察の中で当時の中国人労働者の低賃金、スラム状態の生活、無数の事故など労働条件のひどさに心を痛め、その改善、争議の調停に努力し、社会問題、労働問題に取り組み、仲間を増やし、政治的・社会的活動家との接触ももつようになった。

この学習活動から生れたのが、Marxist-Leninist study groupであった。時期的には、1932年、アレー氏が英国人技師と共同で、上海市西郊の愚園路に三階建の借家をしたところである。やがてこのアレー宅は、革命派の地下組織の連絡場所、隠れ家となり、屋根裏には無線通信機が取り付けられた。

これらの成り行きと前後して、1933年、アレー氏は、スメドレーの紹介ではじめて宋慶齡と出会った。「彼女の家を訪ねると、守衛の家や壁の方から、カチカチというような金属音がよくしたものだ。カメラのシャッターを切る音だったかもしれない」と、彼は回想した。

② Marxist-Leninist study group

このグループの活動は、宋慶齡の指導と援助のもとに進められた。学習と革命派(中国共産党ら)の地下組織との連絡と彼らへの援助を主な活動内容とした。

「場所を変えながら、不定期に会合が行われた。他人にあまり知られていない家がよく使われ、ルーイ・アレーの家は使われなかった。アグネス・スメドレーの小さな家を会合の場にしたりときなど、裏通りから接近し、煙突によじ上り、アパートの屋根づたいに移動して、彼女の家のところで降りたものだった」「このstudy groupと地下組織の間では連絡は敏速に行われた」

グループのメンバーは、7～9人で、ルーイ・アレー、ジョージ・ハテム、シップ〔Shippe 独〕、タリサ・ガラチ〔Talitha Gerlach 米〕、アグネス・スメドレーら外国人がほとんどで、中国人は一人だけだったという。リーダーはアレー氏だった。

③ 《Voice of China〔中国呼声〕》

1936年から37年にかけて、情勢が急変してくると、このグループは、抗日戦のための宣伝、統一戦線内部の団結を促す活動に取り組むようになった。米国人ジャーナリスト、グラニッチ夫妻〔Manny and Grace Granich〔格蘭尼奇〕〕を中心に刊行された《Voice of China》が、その役割を担った。当初は、英語版で2週間に1回、3万部を、仏租界で刷ったが、すぐ売り切れたという。主として学生が買い、英語の教科書代りにも活用されたからである。やがて、中国語版も刊行された。

「《Voice of China》の記事で、一番重要なのは、まず、上海でおこっている出来事を知らせること、中国内部のことを知らせることだった。当時中国共産党には雑誌もなく、放送の術もなかった。そのため、共産党の主張を支持するわれわれは、共産党の情報も流し、その政策も宣伝した。」

主な執筆者は、アグネス・スメドレー、エドガー・スノー、ルーイ・アレー、ジョージ・ハテム、シップ、イスラエル・エプスタイン、マニー・グラニッチ、グレース・グラニッチ、ルース・ワイズなどで、それぞれいろんなペン・ネームを使って多くの文章を書いた。たとえば、アレーは、Han Sumei, Chao Tachi, スメドレーは、R. Knailes, エプスタインは、あるときは人之初〔Len Chi-Chu〕, あるときは性本善〔Hsin Pen Shen〕など。

《Voice of China》が上海で発行されていたころ、スノー夫妻、エプスタインの創刊によって、北京では小さなパンフレットで《Democracy〔民主〕》が刊行されていた。執筆者は、スノー、エプスタインの他にヘレン・フォスター・スノー〔Helen Foster Snow; Nym Wales〕、ジェームス・パートラム〔James Bertram, ニュージーランドの作家、英国人〕、レイトン・シャット〔Leighton Shatt〕等で、抗日キャンペーンを担った。

これら、特に上海における国際的顔ぶれによる活動のあるところには、必ず宋慶齡がいた。「当時宋慶齡の援助がなければ何もできなかった。お金の問題ではなく、擁護、政治的指導という援助であった」とアレー氏は語り、「宋慶齡は自分のことを語りたがらなかった。だから私も敢えて彼女のことを聞かなかったし、彼女のことを敢えて語らないが、われわれの活動をいつも支えていたのは彼女だった」と付け加えた。

4. ジョージ・ハテム

〔George Hatem, 馬海德〕氏

ハテム氏は、一般にドクター・マーハイトとして知られている。現在國務院衛生部顧問の地位にあるが、50年代半ばからは、特にハンセン病対策事業に献身していることで知られている。去る11月22日には、彼の中国での活動五十周年を祝賀する会が、北京の人民大会堂で催され、「五十

年にわたる経験は、自らの役割を果たすには、誰であろうと、確固とした精神的支柱をもたなければならないという真理を教えてくれた。わたしの親友アレー氏が延安精神への回帰を呼びかけたが、わたしも全く同感である」と挨拶されたと北京周報が伝えている。

ハテム氏のこの五十年の活動も、1930年代上海でアレー氏と出会い、宋慶齡の支持を得て始まった。

ハテム氏は、1910年、米国の製鋼工場労働者であるレバノン人の家庭に生まれ、苦学して医科大学を卒業、1933年、上海一帯に流行していた熱帯病の治療に取り組むため中国を訪れた。まもなくアレー氏と出会い、工場視察に同行するうち、職業病、栄養不良の調査を行ない、少年児童工、中毒等の問題に取り組むため、活動の場を診療所から工場内に移し、大量の資料に基いて工場調査報告をまとめた。その結果、労働者階級の状況を徹底的に改変する必要性を痛感し、社会構造の根本的変革を求めるといった。

1936年6月、ハテム氏は、突然宋慶齡から使いがあり、彼女を訪ねた。彼女は「中共中央が米国人記者と医師を各一人、陝北に寄越してほしい、そして辺区の状況を实地に視察し、中共の抗日の主張を理解してもらいたい旨いって来ている。私は、あなたとスノーがいっしょに行くことよと思っている」という話をもちかけた。ハテム氏は喜んで応じ、治療と宣伝の二つの任務をもって、スノーと延安に入るようになった。

ハテム氏は、1937年、呉黎平の紹介で中国共産党に入党し、延安にて革命軍事委員会衛生顧問及び中共中央外事組、新華社等の顧問をつとめ、1940年2月、女優周蘇菲女士と延安で結婚した。「紅軍の活動を宣伝することをもって、革命活動への第一歩とした」と回想するハテム氏は、延安入り後、宋慶齡と延安とのパイプ役を果たしたということである。

お わ り に

北京、北戴河で出会った宋慶齡の友人たちは、一人一人が、大きく、やさしく、実に個性的で、まさに手作りの方法で主体的に中国革命の重要な部分を担い、担いつづけている人々だった。この彼らを中国革命の中に受け入れ、引き留め、献身させるきっかけをつくったのが宋慶齡であった。彼らの存在と活動を知ること、中国革命の一つの特色ある側面を理解することになり、また宋慶齡の中国革命へのかかわり方の一端と彼女の人間像を知る上で有意義である。筆者はまだまだ知らねばならないという思いを深くした。今回の取材内容をもっといねいに整理かつ構造化し、1930年代の宋慶齡の動きを明確にしていく作業をすゝめながら、再度の取材を試みたい。

註. ① Qian Junrui [錢俊瑞], *Great Internationalist Fighter* ("China Reconstructs" 1981.9.)

② 錢俊瑞氏は、現在中国社会科学院顧問、中国世界経済学会会長、中国人民政治協商会議常務委員。この対談の通訳は、中国社会科学院世界経済と政治研究所人員凌星光氏。

③ 新村猛『ロマン・ロラン』(岩波新書)によると、この国際ファシズム委員会は、1926年、ロマン・ロランとアンリ・バルビュスによって発起されたもので、第一回委員会は、1927年、アインシュタインを会長として開かれた。

④ 錢俊瑞「痛悼偉大的国際主義戦士宋慶齡同志」(『人民日報』1981.6.1.)によると錢氏は当時文化界救国会党組書記であった。

⑤ 今夏(1983)8月6・7日の両日の午前中約5時間余、北戴河西山賓館132-6のエプスタイン氏の宿舎で会見取材、夫人の Elsie-Fairfax-Cholmely [邱茉莉] 女士も同席。通訳は申英民氏。

⑥ 1938年、9月17日、インド国民会議派遣医療使節団 (Atal, Cholkar, Kotnis, Basu, ムカージ) が広東着。宋慶齡が何香凝とともに出迎えた。また、使節団の延安行きを、宋慶齡 — スメドレー — 周恩来の連携で手配、ルーイ・アレー氏が案内した。この団員中唯一人の生存者であるパスー氏は、「中国革命支援のために中国に来たのか?」という筆者の質問に対して、「朱徳から、スメドレーを通じてネルーに『反帝目的は同じである。中国では医師が不足している。援助してほしい。』と依頼があった。私は反帝同盟の精神で中国に来た」と答えられたことを付記しておく。

⑦ エプスタイン氏には、このほかに次の著書がある;『人民之戦』(1939, 英),《From Opium-war to Liberation》(1956, 北京, 1980, 香港,《從鴉片戰爭到解放》1964)

⑧ 8月6日の午後、エプスタイン氏のはからいで、北戴河東経路8号樓のルーイ・アレー氏宅で、ジョージ・ハテム氏、ビジョイ・クマール・パスー氏夫妻、エプスタイン氏夫妻による座談会が実現した。通訳は申英民氏。なお、パスー氏の証言については紙数の都合上割愛、註⑥でわずかに触れるにとどめた。

主な参考文献

- 《China Reconstructs》1981.9.
- 愛潑斯坦「我所了解的宋慶齡」(『人物』1980.3.)
- 大形孝平編『日中戦争とインド医療使節団』(三省堂, 1982)
- 『中国福利会四十年』(中国福利会, 1978)
- Geoff Chapple《Rewi Alley of China》
- 田森「喬治・海德姆一馬海德」(『人物』1980.3)
- 王アンナ『革命中国に嫁いで』(篠原正英訳, 平凡社, 1975)